「人文ムセイオン 2023」実施報告

脇條　靖弘

■お前たちに何が起こったんだ！　「人文ムセイオン 2023」は2023年10月28日（ホームカミングデー）に開催された。会場は当初の予定を変更して経済学部の第二大講義室になった。在学生の受講登録者が275名に達し、予定していた人文学部大講義室では収容不可能になったためである。学外からの参加の申込みは12名（内人文学部の卒業生8名、高校生1名）。参加申し込みなしの聴講者も多く、当日の会場には300名以上が集まっていたと思われる。その中には10名以上の人文学部の教員、数名の人文学部の事務職員（前事務職員を含む）が含まれていた。また、山中明理学部長が午前の部に参加してくださった。[*1]

要するに予想以上の大盛況となったわけであるが、「人文ムセイオン 2023」は有名タレントの講演会などではなく、人文学部の教員が行う正規の授業である。何がこれほど受講者を惹きつけたのか。

授業の形式はこうである。共通のテーマを設定し、分野の異なる講義担当教員四名がそのテーマについて講義を行う。今年度の共通テーマは「いのち」。当日は集中講義として4コマ（1.5時間×4）の授業を行う。ただ、各教員の講義を聞く時間は40分だけで、残りは質疑応答、ディスカッションに充てる。司会はコーディネーターの私脇條が務める。講義時間が40分と短く、講義の中で予備的な説明をしている時間はないので、受講者があらかじめ読んでおくべき資料を修学支援システム上に掲載し、それを「事前準備」4コマの遠隔授業（オンデマンド）と位置づける。なので、合計8コマ、1単位の授業である。当日は単に多数が集まっただけではなく、学生たちの授業に望む姿勢がいつもとは明らかに違っていた。普段は少人数の演習は別にして50人程度の講義でも学生からの質問はあまりない。ましてや大教室に満員の人間が集まっている中では気後れして学生から質問は出ないだろうというのが大方の予想であった。フロアにいた人文学部の教員も質問が出なかったときのために何か発言する用意をしてくれていた（と思う）し、司会の私もいざとなったら誰か教員に当てるつもりだった。ところが、うれしいことにそんな配慮はまったくの無用であった。学生（と学外者）から活発に質問が出て、しかもそれは一度も途切れなかった。挙手が複数あって全員に回しきれず、結局フロアの教員には一度も発言の機会がなかった。普段から見ていてよく知っているはずの学生たちのまるで別人のような姿に、私たち教員は皆「お前たちにいったい何が起こったんだ！」と驚いたのである。

■当日の構成　たしかに授業の計画の段階で、学生から挙手がなくてもディスカッションができるように多少の工夫はしていた。40分の講義の後、修学支援システムの「授業内アンケート」からコメントを入力してもらう時間を10分程度確保することはだいぶ前から決めていたが、これにひと工夫加えて、「質問」と「コメント」の二つの記入欄を区分して少なくともどちらかに入力することを必須とした。司会はとりあえず「質問」に入力されたものだけをざっと見て、挙手による質問がなくてもそこから適宜選択して取り上げればディスカッションにはなるだろう、と考えたのである。実際には挙手が途切れなかったのであるが、学生はあらかじめ自分の質問を文章として入力することで挙手もしやすくなったのではないかと思われる。いざとなったら自分の書いた文章を読めば質問になるので、

[*1] 理学部と人文学部は山口大学の「専門教育におけるSTEAM教育」での協力関係を構築しようとしている。「人文ムセイオン」にも今後理学部からの参加が検討されている。

多少はハードルが下がっただろう。

一つ当初の予定から変更したことがある。当初は一つの講義が終わるごとにディスカッションの時間を設けることにしていたが、講義担当教員からの提案で、午前の部、午後の部の二部構成にして、それぞれの部で40分の講義二つを続けて行い、その二つの講義についてまとめてディスカッションを行う形に変更した。ディスカッションでは演壇に二人の講義担当教員と司会の三名が座る形になる。

各講義担当教員とその講義題目は以下のとおりである。

- 午前の部
  - 尾崎千佳：運命と生命－説経『さんせう太夫』の語る生涯
  - 竹中幸史：祖国のために死ぬということ－フランス革命期における「自由の殉教者」崇拝
- 午後の部
  - 速水聖子：リスク社会とLife
  - 岩部浩三：「いのち」を守る総称文

■安寿のいのち、生き方　トップバッターの尾崎の講義がこの日の方向を決定づけた。尾崎の講義は、事前準備の資料として森鴎外の『山椒大夫』を受講者に読ませた上で、そのもとになった説経『さんせう太夫』に切り込んでいく。鴎外版にはない衝撃的な拷問シーン、復讐シーンを織り交ぜた安寿と厨子王の物語が、尾崎の巧みな語りの調子[*2]に乗って展開される。私たちはそれに引き込まれ、オリジナル版がまさしく「安寿のいのち、生き方の物語」であったことを理解した。そこでは弟の厨子王はどちらかというと優柔不断で、自分たちが奴隷の身分にされてしまったという現状を甘んじて受け入れようとしているが、姉の安寿は家の復興という高い目標を見失わず、弟を叱咤激励して逃亡させ、自分は拷問を受けても口を割らず（それどころか逆に挑発的な啖呵を切って）とうとう責め殺されてしまう。頼りない男をしっかりした女が導くというパターンは当時よくある定形だという説明がなされたが、それにしてもなんという悲劇だろうか。「（あら）いたわしや」という嘆き節を伴いながらも、語り手は一人の女性がいのちをかけて、力強く生きる姿を描き出して行く。

尾崎の講義は「いのち」というテーマにふさわしいスタートとなった。この日のディスカッションで最後まで質問が途切れなかったのも、尾崎の講義のインパクトが最後まで続いていた結果だと私は思う。

思えばこの講義の実施準備にあたって尾崎の貢献は大きかった。私はこの授業のコーディネーターでありながら、当日が近づいても具体的なやり方にいくつか問題があることに気づいていなかった。講義の順序からして無頓着だった私に尾崎ら担当教員から意見があり、これについては「ほぼ時代順」に並べることになった。また、先程述べた二つの講義をまとめて行う方式も尾崎の提案である。（さらに、事前準備の資料の外部へのオンラインでの公開についての著作権上の問題についての私の認識が甘く、講義担当教員、特に尾崎には多大な迷惑をかけてしまった。この場を借りてお詫びしたい。）

[*2]　尾崎の「語り」に快いリズムを感じたのは私だけではない。他にも証言がある。

図１　尾崎の講義

■学生に研究者の本気を見せる　尾崎の講義の後、コメント入力の時間をとり、すぐに竹中の講義が始まった。フランス革命時、自由のために殉教したとされる者の中に二人の少年がいた。バラとヴィアラである。バラは敵に囚われたとき「国王万歳」と叫ぶことを強いられるがそれを拒否し殺される。ヴィアラは敵軍の渡河を防ぐために舟橋の綱を切ろうとして被弾し、命を落とす。受講者は、事前準備の資料*3により、この二人の少年の物語がロベスピエールによっていかに都合よく脚色され利用されたかを理解した上で講義に臨んだ。講義では、二人の少年以外にも多くの「自由の殉教者」が取り上げられ、とりわけルアンの事例について資料に基づいた詳細な考察が展開された。

この講義の主要部分で竹中が用いた資料は一次資料のみである。（言っておくがこれは授業であって、学会発表ではない。）学部学生に「研究者の本気を見せる」ことこそが彼らに人文学の魅力を伝える最良の方法であると竹中は信じている。当日の竹中の講義はそれを実証するものであった。歴史的事実の本当の意味を明らかにするために一次資料の分析がいかに重要であるかを学生は思い知ったであろう。ルアンにおける当時の4つの殉教者式典の記録から、愛国者について都合のよい「記憶」が創造されていく過程が見えてくる。街路や広場の名前までもが、殉教者を中心とした理想化された人物の名前を冠するものに変更されていく。さらに、「理性の祭典」の行列コースには、古いルアンの「死」と革命化されたルアンの「再生」という意味が込められていることが明らかになる。

図２　竹中の講義

竹中は「人文ムセイオン」の計画に当初から成功の可能性を嗅ぎ取っていた。もとをたどればこの

*3　天野論文（天野知恵子「国民国家の創設と愛国少年伝説の展開：フランス革命の英雄バラ，ヴィアラ」『史学雑誌』106巻9号、1997年、1659-1685頁）と竹中自身の『図説フランス革命史』（河出書房新社、2013 年）第5章及び8章と主要参考文献。

計画は「人文コア教育」という名称で構想されたもので、学生、教員が何か一つの書物を核（コア）として共有する形の教育ができないか、という発想で始まった。その後、書物ではなく共通テーマを設定することになったが、もともとこれを提案した私は教育面の効果だけでなく、研究活性化の効果も期待できるかもしれないと考えていた。異分野の教員が同じテーマを扱って接触することで、わずかでも研究活動のに刺激になればよい。この講義をもとにして担当者が論文や研究ノートを『異文化研究』に執筆することにしてはどうか、などと考えていた。さらに、どうせやるなら学外者にも公開して、人文学の成果を社会に還元する社会貢献の場にすればよい。そういう、一石二鳥、三鳥の欲張った企画であった。

「さすがにこれは都合が良すぎるし、負担も重い」という当然の意見が出て、研究活性化については論文などの執筆は課さず、『異文化研究』にはコーディネーターが報告（この文章）を載せるに留めることとなった。（ただ、もちろん今でもこの催しによって研究活動によい刺激があればよいと思っている。）授業の外部への公開はやることになったが、これについても目的が教育なのか、社会貢献なのか明確にすべきだという意見も頂いている。

そういう意見交換の場で、竹中は常にこの計画の意義について前向きな意見を述べていた。教務関係者の話し合いの中で「教員が進んでやる気になる面白い催し」にしよう、というのが考えの主軸になった。そのためになるべく教員の負担を軽くして、一日だけの集中講義にして、ホームカミングデーの日に重ねてはどうか、というのも竹中の提案である。

計画段階から当日までの間、竹中の果たした役割は非常に大きいが、その中でもなんといっても在学生に向けた広報活動が特筆に値する。まず年度初めの1, 2年生向けのガイダンスで竹中は教務委員長として、特別に力を入れて「人文ムセイオン」について説明をしてくれた。基礎セミナーの最終回はここ数年学部長担当の回となってるが、今年（7月28日）は特に「人文ムセイオン 2023」の予定があることを取り上げ、そこに竹中と速水の二人の講義担当教員を招いた。その授業は大変盛り上がり、学生からは「ぜひムセイオンを受講してみたい」というコメントが多々寄せられた。その後も竹中の広報活動の効果は絶大で、「どうしても当日に所用があって参加できないが、竹中先生から『この授業を受けないなら人文学部に来た意味がない』と言われてどうしても諦められない、オンラインでの配信はできないのか」というメールの問い合わせが私のところに来たほどである。（残念ながらオンライン配信はできなかった。）それから、忘れてはならないのがポスターである。アレクサンドリアのムセイオン内のプトレマイオス二世の姿を描いた19世紀の絵画をバックにしたハンサムなポスターは竹中の作である。これはポスターを作り慣れている本部の事務員の間でも「素敵ですね」と好評だったと聞いている。

■死が当たり前の時代　さて、竹中の授業についてのコメント入力と休憩の時間があり、いよいよ尾崎と竹中の講義についてのディスカッションが始まった。さまざまな質問が出されそれについて議論がなされたが、最も印象深いのは「死が当たり前だった時代」という論点である。当然ながら、安寿の時代もフランス革命の時代もわれわれの時代とは違うのである。それはちょっとしたことで人が簡単に死んでいく時代であって、死はだれにでも降りかかってくる当たり前のことだったのだ。だから、安寿の時代に単に誰かが（特に男が）死んだというだけでは物語にもならない。現代においては「とにかく死を避ける努力をする」ということがひとまず価値を持つとしても、それが安寿の物語やその聴衆、あるいはフランス革命前後の人々の中で同じ価値を持つとは限らない。このことを理解しなければ、安寿の物語が語られた意味も、フランス革命における殉教の意味も理解することはでき

ない。竹中は午後の討論の後の全体の総括の中で衝撃的な例を提示した。フランス革命のちょっと前までは子供の墓はなかった、というのだ。子供が死ぬのが当たり前の時代で、ある人物は死んだ子供の名前を帳面の隅に記録しただけだった。竹中は言う。「彼は例外です。帳面に記録したんですから。他の人たちはそれさえしなかった。」

図３　午前の部のディスカッション

午前中のディスカッションを終えた段階で、すでに会場には「この場に立ち会えてよかった」という満足感が溢れていたように思う。昼休みには学生が親しい仲間と議論の続きをやっている姿が見られた。また、後のアンケートから、自分が質問できなかったことについて友だちと自主的に話し合った学生もいたことがわかる。

■現代のリスク　さて、昼休みを挟んで午後の部のスタートは速水の講義である。受講生は事前準備の資料*4から科学的知識を社会に活かす難しさを、また、科学の持つ蓋然性がはらむ問題を理解した上で講義に臨んだ。講義では、科学が発達した現代という時代がもたらす新しいリスクという観点が中心に置かれた。ここでは少なくとも三つの点が区別されなければならないように思われる。第一に、社会が豊かでなかった時代にはリスクではなかったものが、豊かな現代にはリスクとなる。たとえば、十分な食べ物が確保できずに死ぬ人が当たり前にいる時代に、食品の中にわずかに体に悪影響を与える可能性がある成分が含まれていても、それはリスクとはみなされないだろう。他に大きなリスクがあるときは、小さいリスクは意味を持たない。第二に、リスクに関する同じ情報を得ても、人によってその評価はさまざまである。リスクを高く評価する人はそうでない人から見て理由のない恐れを持っているように見える。逆に、リスクを低く評価する人はそうでない人から恐れるべきものを恐れていないように見える。これは特に現代のリスクに顕著であろう。（ひょっとすると、このような様々な評価をする個体が存在しているがヒトの進化に有利だったのかもしれない。）第三に、事前準備の内容に関連するが、一般の人はリスクの評価を科学者に委ねるが、科学はその本質からして確定的な答えを与えることができない。

*4　『科学と非科学－その正体を探る』（中屋敷均、講談社現代新書、2019）の一部。

図４　速水の講義

すでに明らかなように、速水の論点は午後の部だけでなく「人文ムセイオン 2023」全体を貫く軸となるものであった。人の死が日常であった時代のリスクと豊かな現代のリスクは同じではない。それを理解しなければ、安寿の振る舞いもフランス革命当時の人たちの行動も理解できないし、私たちが今リスクにどう向き合うべきかという問いにも答えられない。しかし、少し先走ってしまったかもしれない。まだ最後の講義が残っている。

■いのちを守る言語　速水の講義についてのコメント入力と休憩があり、岩部の講義が始まった。岩部は自然言語が持っている総称文という種類の文に着目する。*5「犬は賢い」などの総称文の中には、「サメは海水浴客を襲う」など少数のものにしか当てはまらないもの（Striking Generic）がある。これらは命にかかわる危険性を述べたものが多い。これらは安全を確保する役割を持つ「いのちを守る総称文」である。総称文は二歳半という非常に早い発達段階で習得される。ただ、いのちを守る総称文が人間に適用された場合、社会的偏見や差別につながる場合がある。たとえば、実際にイスラム教徒の中にテロリストはわずかしかいないにもかかわらず、「イスラム教徒はテロリストだ」という総称文によって、あたかもイスラム教徒すべてがテロリストであるかのような偏見を助長する危険をはらんでいる。この危険はどのように克服できるか。これに関して岩部はあくまで言語学的考察によってアプローチしていく。総称文には無冠詞複数形、不定単数形、定単数形などの区別があり、Striking Genericは無冠詞複数形のみに見られる。これらの形式を区別することで社会的偏見を克服することができる可能性がある。

図５　岩部の講義

*5　事前準備の資料は、岩部自身の論文「総称文の謎を認知能力の複合性から解く」、JELS, 2019.

以前私はピアレビューで岩部の授業を参観したことがある。その授業はまさにこの総称文を取り上げたものであった。その後人文ムセイオンの計画が持ち上がった時、私はぜひとも言語学分野を含めたいと考えていた。ただ一般的に言語学分野は他分野と共通テーマで議論するのに馴染みにくい面があるように思われた。しかし、岩部のこのテーマならうまく噛み合うのではないか。そのような思惑で私は真っ先に岩部に講義担当を依頼したのだが、当日の岩部の講義はみごとにその期待に答えてくれた。

■直観と理性　岩部の講義についての質問、コメント入力の時間があり、午後の部の最後に速水と岩部の講義についてのディスカッションが行われた。いのちに関わるリスク回避という共通項をめぐってさまざまな意見が交わされた。議論の一つの焦点は、リスクに対して私たち人間が持っている本能的、直観的な反応のレベル（速い思考）と、論理的、理性的な判断のレベル（遅い思考）が一致しないことであった。速水の講義では、第二の論点（リスクに反応する程度に個人差があること）がそれに関連するものである。岩部によると総称文によるリスク回避は幼児のレベルで効力を持つ。他方、理性的に判断できるまっとうな大人は、正しい知識を得ることで偏見や差別を避けることができるため、幼児期に獲得した総称文をそのまま受け入れることはしない。ただこれには例外があるかもしれない。数年前アメリカの某有名政治家は露骨に反イスラムをあおる発言を繰り返していた。これはある種の政治的効果を計算した上での発言である、というのが普通の解釈かもしれない。しかし、岩部は別の可能性が排除できないことを示唆する。もしかして「イスラム教徒はテロリストだ」という総称文を彼は本気で信じているのではないか。そうだとしたら、彼は幼児のレベルに留まっている。

図６　午後の部のディスカッション

■受講者アンケート「人文ムセイオンを振り返って」　「人文ムセイオン 2023」は成功したと思う。それは翌週に実施した「人文ムセイオンを振り返って」という無記名の受講者アンケートからも明らかである。（このアンケートは当日会場で終了後すぐに行うべきであったが、実施が遅れたのが悔やまれる。）このアンケートでは81名から回答があり、そのすべてが肯定的な意見であった。来年も開催されるなら、単位が出なくてもいいから参加したい、という意見が数多くあった。各教員の受け答えが「かっこよかった」という意見も多かった。学問的知識の裏付けをもつことこそが「自分の言葉」で応答することを可能にすることを学生たちは理解したと思う。これは学びへのモーティベーションに確実につながったはずである。人文学を学ぶ意義が理解できた、人文学部でよかったという声もあった。目を引くのは、他の人文学部生の発言から刺激を得られたという意見である。他の学生の質問を聞いて、自分の中にも同じ疑問があったことに気づき、次回こそは自分で質問したいと思ったと

言う学生もいる。「人文ムセイオン 2023」は人文学部の多くの学生に人文学を学ぶことの価値を認識させ、学びに向かう純粋な動機に火をつけた。

■グレード評価の罪　ここで一つ問題提起をしておきたい。成績評価についてである。この授業にはグレード評価はない。合格者には「認定科目（専門）」として一単位が与えられるが、成績には認定と不認定の区別があるだけで、「秀、優、良、可、不可」というグレードの区別はない。私はこれはこの授業の美点だと考えている。（なお、単位認定の基準は四つの講義すべてに対して質問あるいはコメントを入力することである。ハードルはかなり低いと言ってよい。）取り上げたいのは、グレード評価が学生の学ぶ意欲を阻害しているのではないか、という疑問である。

これについては興味深い研究結果がある。[*6]（以下の文章は2021年6月の学部長ブログ「学部長室の窓から」に依っている。）学生をA，B，C三つのグループに分けて、Aにはグレード評価を、Bには文章で改善点を指摘したコメントを与え、Cには何の評価も与えない。そして、その後で学生にテストをする。そうすると、大差でBが最もよい成績を残す結果になった。学生の学びの促進には、グレード評価よりも改善点を示したコメントが有効だということがわかる。これは当然のようにも思えるが、面白いのはこの後である。コメントに加えて、グレード評価も追加で与えてみたところ、なんとその追加によってコメントの効果がなくなってしまったのである。グレード評価は学びを促進するどころか、それを阻害する要因になっている、というのがこの研究の結論である。学生の気持ちとしては、コメントだけなら読むが、「良」とか「可」とかの評価がついてくると読む気にもなれないというところかもしれない。

「人文ムセイオン 2023」にはグレード評価がつかないことはあらかじめ受講生に伝えていたので、もしかしたらそれが学びの意欲をキープできた原因になったかもしれない。アメリカの大学ではすでにグレード評価そのものを廃止したところもあるということである。[*7]たとえば、ベニントン大では学生は詳細な文章による評価（narrative evaluations）を受け取る。日本の「秀、優、良、可、不可」のようなグレード評価は希望すれば追加でもらえるとのことである。日本では、「厳格な成績評価」とか「成績評価の厳格化」によって大学教育の効果を高めるべきだという議論を耳にするが、進むべき道を見誤っていないだろうか。

■最後に　「人文ムセイオン 2023」の実施については、尾崎、竹中、速水、岩部の四名の担当教員を始め人文学部の多くの教員にご協力をいただいた。とりわけ、真木教学部長はじめ教務学生連絡会、教務学生部会の構成員の方々からは本文でも述べた通り、計画の段階で実施形態について多くの建設的なご意見をいただいた。事務職員、特に学務係（前坂前係長、香川現係長及び係員の方々）は、試行錯誤に伴う余分な負担がかかる中で、常に前向きに実施の詳細を詰めてくれた。この場をお借りして深く感謝申し上げる。すでに次に向けての計画がスタートしており、来年度は竹中コーディネーターに「人文ムセイオン 2024」の実施を委ねることになっている。理学部の教員をコメンテーターとして招く予定もある。どのようなテーマが設定されて、当日どのような議論がなされるのか、今から私も楽しみにしている。

---

*6　Jeffrey Schinske and Kimberly Tanner, Teaching More by Grading Less（or Differently）, *Life Sciences Education* Vol 13, 159-166, 2014.

*7　*The Post-Pandemic Liberal Arts College: A Manifesto for Reinvention*（Belt Publishing, 2020）, p.117.